



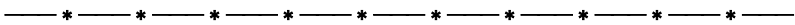
**Data**

監督: イ・ジュヒョン  
製作・脚本・編集: キム・ギドク  
出演: キム・ユミ/チョン・ウ/ソ  
ン・ビョンホ/パク・ソヨン  
/パク・ビョンウン/カン・  
ウンジン/オ・ジェム/カ  
ン・ドウン/ソン・ミンス

## 👁️👁️ みどころ

「南北問題」をテーマにした名作は多いが、キム・ギドクの脚本は、ユーモアたっぷりの目で家族を描く中で、南北問題を考えさせてくれる。『トンマッコルへようこそ』（05年）も良かったが、本作ラストの口汚いののしり合いは、涙と感動を呼ぶ名シーンになっている。

任務に忠実。それは当然だし、それ自体は良いことだが、それだけではファミリーの絆はムリ。北の「素敵」一家と南の「ダメ」一家をトコトン対比しながら、レッド・ファミリーの悲哀に迫りたい。そして、そこから浮上してくる、あなたにとっての、家族とは・・・？



### ■□■南北問題を描くキム・ギドク監督の構想力と切り口は？■□■

南北問題をテーマにした韓国映画の名作は多い。それは『シュリ』（00年）、『二重スパイ』（03年）（『シネマルーム3』74頁参照）、『JSA』（00年）（『シネマルーム1』62頁参照）、『DMZ 非武装地帯 追憶の三十八度線』（04年）（『シネマルーム8』94頁参照）、『SILMIDO（シルミド）』（03年）（『シネマルーム4』202頁参照）、『ブラザーフード』（04年）（『シネマルーム4』207頁参照）等々だが、その多くはシリアスで涙を誘うもの。唯一の例外は『トンマッコルへようこそ』（05年）（『シネマルーム11』141頁参照）で、これは朝鮮戦争を、深刻な目ではなく、ユーモアたっぷりの目で描きつつ最後は素晴らしい感動を観客に与えるという映画だった。キム・ギドク監督には「韓国の鬼才」という冠がつけられることが多いが、それは彼にしかできない独特の構想力と切り口のため。彼が南北問題を扱った映画は、私が観ていない『ブンサンケ』（1

1年)に次いで2作目だが、さて、脚本を担当した本作に見る、彼独特の構想力と切り口は？

邦題の『レッド・ファミリー』は原題の『RED・FAMILY』を片仮名に市だけ。南北問題をテーマにした映画で、そのタイトルが「レッド・ファミリー」と聞けば、それだけで何となく皮肉っぽいニュアンスが伝わってくる。「レッドカーペット」ならぬ「レッドファミリー」とは？

本作は、韓国の某地で「仲むつまじくて、いつも幸せそう。うらやましいわ」と隣人に言わせる、威厳のある祖父役のチョ・ミョンシク (ソン・ビョンホ)、優しい夫役のキム・ジェホン (チョン・ウ)、おしとやかで貞淑な妻役のベク・スンヘ (キム・ユミ)、そして彼らを敬う娘役のオ・ミンジ (パク・ソヨン)、という4人家族がメインキャスト。しかし、実はこの4人家族こそ「レッドカーペット」ならぬ「レッドファミリー」、つまり「赤い国」からやってきた、金正恩 (キム・ジョンウン) 主席に忠誠を誓う秘密工員たちの仲むつまじい(?) 姿なのだ。なるほど、なるほど。

南北問題をふんわかとしたユーモアで包んだ『トンマッコルへようこそ』も素晴らしかったが、本作にみるユーモアあふれる構想力と切り口も、さすがキム・ギドク監督ならではのものだ。とはいっても、本作でキム・ギドクは制作・脚本・編集を担当し、監督は自ら抜擢した本作が初の長編映画となるイ・ジュヒョン。何度か観た予告編だけでも楽しそうな映画だった(?) から、3日の試写は大いに楽しみだった。



© 2013 KIM Ki-duk Film. All Rights Reserved.

## ■□■まずは、この豹変ぶりにビックリ! ■□■

冒頭に描かれる4人家族のドライブ旅行はどこにでもよくある風景で、ホントに楽しそう。ミョンシク、ベク、ミンジの3人は写真撮影に夢中だが、バーベキューの席に1人座



© 2013 KIM Ki-duk Film. All Rights Reserved.

さんから撮影禁止！と怒られたが、冒頭の写真撮影場所はいずれも韓国の軍事施設の近くらしい。したがって、軍服の兵士から撮影中止！カメラ没収！と迫られたが、そこを4人のチームワークでうまく乗り切る（ごまかす？）ところが面白い。このようにして、楽しいドライブが終わり、郊外の一戸建ての家に戻り、家の中に入ると・・・。

そこからの4人の豹変ぶりが面白い。この導入部だけでイ・ジュヒョンはさすが鬼才キム・ギドクが抜擢した監督だと感心させられることになる。一方、部屋の中に入ると中山美穂に似た（？）美人妻のベク班長は、韓国の軍事基地の写真撮影という今日の任務を実行するについての、出来の悪さについて、ジェホンとミョンシクを叱責！あの車のぶつけ方は何だ！ちゃんと人身事故になるようにぶつけられないのか！あのやさしそうな美人妻が北朝鮮のスパイ「ツツジ班」の鬼班長に豹変する姿は面白い。もちろん、ここで下手な弁解は許されるはずはないから、ジェホンもミョンシクもただ謝罪するばかりだが、まあ本日の目的であった軍事基地の写真撮影の出来はまずまずのようだから、それに免じて・・・。

## ■□北の「素敵一家」V.S.南の「ダメ一家」は？■□

韓国人の声は、なぜいつもあんなに大きいのか？韓国映画を見ているといつもそう思うが、とりわけ本作では全編を通じて声の大きさが際立っている。それは、隣のダメ一家の夫婦仲が悪く、いつも大声でのしり合いのケンカをしていることが1つの



© 2013 KIM Ki-duk Film. All Rights Reserved.

ってそれを見守っているジェホンもいかにも楽しそうだ。また、帰り道に車の接触事故が発生すると、ミンジはさかんに写真を撮っているが、これは修理代金を見積もるため？私は8月17日～21日の台湾一周旅行の際、バスの中から軍事基地に見える飛行機を撮影したところ、ガイド

原因だ。夕食の時、「朝鮮にいる妹より贅沢だ」としんみりするミンジに対して、「健康を保ち、任務を果たせば、また家族と暮らせる」と指導しているベク班長の姿を見ると、任務の達成が何より大切な北朝鮮の職員にとっては、食事をとることすら、任務の一環だということがよくわかる。

そんな彼らに聞こえてくるのは、「これが晩メシかよ！」「嫌なら出てって！」「毎日ケンカするな！」という隣家の怒鳴りあう声だ。隣に住むのは、自己中心的な夫（バク・ビョンウン）、料理一つ出来ない浪費家の妻（カン・ウンジン）、嘆いてばかりの祖母（カン・ドゥン）、そんな両親に敬意の欠片もない息子（オ・ジェム）という4人家族だが、夫と妻が口汚くののしり合う夫婦ゲンカの姿は、以降何度も何度も登場するのでそれに注目！そんな南のダメ一家の姿を見てベク班長は「まさに資本主義の限界だ」と毒づき、他の3人に対して「我ら朝鮮は決して墮落してはならない」と訓示していたが、さてその適否は・・・？

南のダメ一家の夫婦間に根本的

に欠けているのは互いを敬う気持ち。夫の稼ぎが悪いと毒づく妻はサラ金地獄に陥っているようで、これでは毎日のように夫婦ゲンカを目にしている息子に両親を敬う気持ちが育たないのはやむをえない。こんなダメ一家に比べれば、ツツジ班は偽装ではあっても、「家族の絆」は強く、どんな任務でも与えられれば確実にこなす優秀な職員家族・・・。



© 2013 KIM Ki-duk Film. All Rights Reserved.

## ■□アレシ・・・、これで優秀かつ冷酷な職員？■□

『シュリ』でも、『二重スパイ』でも、『SILMIDO (シルミド)』でも、北朝鮮の職員は優秀で冷徹なものと同場が決まっている。しかし、上層部からツツジ班に命令され

た脱北者の暗殺命令その1、その2の実行ぶりを見ているとアレレ・・・？もつとも、脱北者の暗殺計画その1について「拳銃で殺るのならできる」と答えたジェホンに対して下された命令は「針金でやれ」というものだったから、こりゃちょっとしんどいかも・・・？また、夫婦とその赤ん坊の3人を殺せという脱北者の暗殺命令その2の実行については、ジェホンを「腰抜けめ！」とののしったベク班長自らが、「私が模範を示す」と意気込んで臨むことに。しかし、一人娘を北朝鮮に残して（人質にとられて）現在の任務についているベク班長は、どうしてもこの赤ん坊を撃つことができなかったからアレレ・・・。

ここで問題は、何でも監視社会の北朝鮮にあっては、偉大なる首領・金正恩將軍サマの命令を忠実に遂行すべきベク班長たちにも、ちゃんと監視がついていること。工場の男（ソン・ミンズ）はその1人だが、彼らはツツジ班全員の任務の遂行ぶりを常に監視していた。もしツツジ班が任務の遂行を怠り、裏切ったりすれば、それぞれが北朝鮮に残している家族たちの命にも影響するわけだ。ツツジ班の監視は工場の男だけではなく、偽装家族を演じているツツジ班の班員相互間でも同じ。とりわけ班長のベクは班員たちの「心の揺れ」も含めた動静を把握し適宜必要な情報を上層部に上げなければならないのは当然だ。したがって、死にかけの鳥の姿を見て珍しく我が身を鳥に重ねたミョンシクが、ジェホンに「国に40年間従ってきたが何も変わらない」と珍しく愚痴をこぼすと、たちまちベク班長は「たるんでいる！」と怒鳴りつけた。しかし、人間のそんなちよつとした正直な感情も口にすることができないとは・・・。

## ■□■2つの家族の「交流」にみる南北問題は？■□■

ツツジ班には脱北者の暗殺を中心とする任務の他、韓国の仲の良い家族を偽装するという重大な任務があった。そのため、ベク班長が「資本主義の限界だ」とボロクソにこきおろした隣のダメ一家でも、祖母の誕生日パーティーのお誘いを受ければ、むげに断るわけにはいかない。また、ミンジの誕生日パーティーだといって、ワインとケーキを持って押しかけてくれば、これにも付き合わざるを得ない。私の目には、演技には素人である4人のスタッフが精一杯下手な芝居を演じているようにみえるが、演じている4人はそれぞれ大変だ。

その場で自分たちが敬っている金正恩首領のことを悪く言われれば反論したくなるのは当然だし、北朝鮮のことをケチケチにけなす南のダメ一家の言葉に対してもいちいち反論したいのも当然だ。そんな議論(?)の中、ベク班長たち家族は「親北の家族ね」と言われてしまったから、こりゃちよつとまずい・・・。しかも、若いミンジと若いチャンスの2人は、議論の最終段階では「南北両国が心を開いて話し合うべきだ」という主張で一致。これにて両家族の硬軟とりまぜた食事時の話題は収まったが、収まらないのは会話の一部始終を盗聴していた監視員たちだ。

4人家族を偽装したうえで、上層部からの命令を実行すべきツツジ班の全員が南の墮落

した思想に侵されている。そう判断した党の監視員たちのマークがその後、厳しくなっていったのは当然だが、さらにそこで、ベク班長が犯した大失敗とは・・・。

## ■□■この失敗は命取り！■□■

韓国へ潜入している北朝鮮の工作員の間では情報が命だが、その情報を握っているのは上層部に限られ、下部は命令を忠実に実行する駒にすぎない。本作では、ベク班長以下4人のツツジ班員たちの北朝鮮に残された家族は具体的な姿としては登場しないが、ストーリーを動かす大きな原動力になっている。4人がそれぞれどんな家族を残し、その家族に対してどんな思いしているのかは、あなた自身の目で確認してもらいたいが、今北朝鮮に残したジェホンの妻が脱北したとの情報がベク班長の元に入ったから、ベク班長はビックリ。



© 2013 KIM Ki-duk Film. All Rights Reserved.

とりあえずその情報はジェホンの耳には入れなかったが、そこでベク班長が考えたのは、より大きな手柄をたてることによって、ジェホンの妻の安全を上申すること。そして、上からの命令だと偽って実行したのが、「転向した反逆者」である北朝鮮の元将校の暗殺だ。これを実行すれば、党はツツジ班の大手柄を評価し、ジェホンの妻の脱北も許してくれるのでは・・・？ところが『二重スパイ』の例をみるまでもなく、諜報の世界では「二重スパイ」がごろごろしているのは当然。韓国でも有名になるほどの“転向した反逆者”がもし二重スパイだったとしたら・・・？ツツジ班程度の工作員はいくらでも送りこむことができるが、「二重スパイ」を育てるには長い年月が必要であるうえ、今そこから得ている情報は重要なものばかり。なのに、その貴重な情報源である「二重スパイ」を、よりによってツツジ班のバカ工作員が暗殺してしまうとは！

この大失敗は命取りで取り返しのつかないものだったから、そこで党からツツジ班の4

人に下されたのは「自殺命令」。さあ、ニッチもサッチもいなくなった状況下、自殺命令の執行は？そしてまた、そこでベク班長たちはいかなる行動を？

## ■□■新たな命令とは？究極の選択は？■□■

キム・ギドクが脚本を書いているだけに、本作は全体時間を100分に抑えているうえ、進行のテンポは早く、心地良い。しかも、北の素敵一家も、南のダメ一家も、さらにツジ班を監視する党の幹部たちもみんなとにかく大きな声で喋るから、会話がよく聞き取れてわかりやすい。もっとも、南のダメ一家の夫婦ゲンカの声ベク班長たちの家の内部でもあれだけ大きく聞こえるのなら、ベク班長たちが「朝鮮民主主義人民共和国万歳！」と叫んでいる声も、向こうに聞こえるはずだが、そこらは映画はつくりものとして、いい加減でもOK・・・？それはともかく、党からの命令が絶対、上からの命令が絶対で、かつ命令の実行は全て監視付きというシステムの北朝鮮でも時々「個人的命令」なるものがあるらしい。



© 2013 KIM Ki-duk Film. All Rights Reserved.

脱北したジェホンの妻を助けるための、「大手柄獲得計画」もベク班長が企画した「個人的命令」だったが、今大失敗をしてかき「自殺命令」を受けるという絶体絶命のピンチにあるベク班長たちに、監視員たる党幹部が下したのも「個人的命令」。それは何と、ベク班長たちが墮落した原因である隣の家族を皆殺しにしろ！というものだ。なるほど、北朝鮮の発想とはそういうものか・・・。この時点でベク班長は自分の命はどうでもよいと覚悟を決めており、何とか助けたいと願っているのは北朝鮮に残している娘の命だけ。しかし、娘の命を救うために、何の罪もない隣の4人家族を皆殺しにするのはいくら何でも酷。しかし、いくら酷でもそれを実行しなければ・・・。実行期限は明日まで。実行方法は島に誘い出して、一気に・・・。そこまで具体的に命令されれば、さてベク班長の究極の選

扱は・・・？

## ■□ケンカができてこそ家族！この言い争いに涙が！■□

急に引越しが決まった。記念に明日、島に旅行に行こう。お金はこちらが持つから。そんな提案にあくまで無邪気な南のダメ一家は即賛成！とりわけ、チャンスはミンジとの仲を一気に深める良いチャンスだと考えたのは当然だ。映画は所詮作りものだから、こんなラストのシークエンスの設定としては、2つの家族の対比と、それをあくまで見張り続ける監視員たちという構造を明確に示せばいい。それを迫力あるシーンとし、観客に手に汗を握らせるのは俳優たちの仕事だ。しかし、ベク班長の究極の選択は決まったの？また、ベク班長の計画を打ち明けられ、共にその実行計画に参加している他の3人それぞれの究極の選択も決まったの？

それはあなた自身の目で確認してもらいたいが、本作のラストで涙を誘うのは、北の素敵一家による口汚い言い争いのシーンだ。南のダメ一家は私の目からみても、ホントにダメ一家だと思うものの、あれだけ言いたいことを言えば気持ちがいいはず。弁護士を目でみれば、あれだけ毎日別れたい、別れたいと言っているのなら、さっさと離婚すればいいのに、とってしまう。しかし、あの夫婦にとっては、ひょっとして別れる、別れる、とわめくこと自体が「おはよう」と同じような夫婦の日常会話なのかも・・・。

最初にそんなパラドックス(?)に気づいたのは、班長のベク。一方で「まさに資本主義の限界だ」と毒づきながら、ワインでしたたかに酔ったベク班長は「あんなに言い争う家族が、妙にうらやましい」と正直な気持ちをもらしたが、この観察眼こそ、さすが鬼オキム・ギドクの脚本だ。ミョンシクとジェホンが党の監視員たちと言い争うシーンでは、ミョンシクの「工員である前に人間だ」とのセリフも強烈だが、そこまで明確に言わずとも、キム・ギドクの脚本とイ・ジュヒョン監督の演出は、人間らしさとは何か?を見事に表現していく。しかし、手を針金で縛られ死を待つばかりのツツジ班が急に口汚く言い争うシークエンスのセリフは、あの時の南のダメ一家たちのセリフと全く同じだ。こういうテクニックを使えば、脚本を書く手間を省ける効用もあるが、芸達者な4人の俳優が演じたこともあり、偽装家族によるこの偽装の口汚いのしり合いは新鮮かつ面白い。そして、あの南のダメ一家から聞いた1つ1つのセリフが、ツツジ班の班員一人一人の口から出されていくにつれ、私の目には次第に涙が・・・。言いたいことを言えてこそ家族！ケンカができてこそ家族！「セリフの再使用」という奇妙なテクニック(?)で、そんな当たり前のことを感動的にスクリーン上に見せていくキム・ギドクの脚本に拍手！さらに、その思いを見事にスクリーン上に演出したイ・ジュヒョン監督と、ツツジ班4人の演技力に拍手！

もっとも、それに続くちょっとしたオチ(?)には、私は少し違和感が残ったが・・・。

2014(平成26)年9月5日記